

## 人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる(Ⅲ) —那覇市のフィールドワークから—

増田 康弘

### 1. はじめに

筆者による琉球王国に関連する資料・調査報告は、今回で三度目となる<sup>1)</sup>。前回のフィールドワークでは、琉球の五偉人に数えられる儀間真常と程順則の墓を訪れ、二人の功績から現代社会とのつながりについて考えたわけであるが、今回は筆者が巡った史跡の中から、「冊封七碑(中山第一)」「徐葆光顕彰の碑」「玉城朝薫生誕の地」「玉城朝薫生誕三百年記念碑」を取り上げ報告する<sup>2)</sup>。徐葆光や玉城朝薫が活躍した時代の東アジアは、最も安定し繁栄していたとされる。本稿では、同じ時代を生きた二人の功績をとおして、琉球王国の一端に触れ、現代社会との関係について考えてみたい。

### 2. 那覇市のフィールドワークから—2017年11月4日実施

#### (1) 冊封七碑「中山第一」と徐葆光顕彰の碑(じょほうこう1671~1740)

冊封七碑<sup>3)</sup>とは、那覇市の首里城公園内「瑞泉門<sup>4)</sup>」の手前にある「龍樋<sup>5)</sup>」周辺に設置された7つの石碑のことである。そのうちの1つに「中山第一<sup>6)</sup>」と刻まれたものがあり、この石碑の題字者が徐葆光である。琉球の時代、中国皇帝の使者として遣わされた冊封使は、「龍樋」の水の清らかさを讃え、漢詩を詠んだり題字を残したりしたという。一方、徐葆光顕彰の碑は、首里城公園内のレストラン「首里杜」横の広場に存する。この顕彰碑は、「徐葆光の高徳と功績を讃え、未来永劫にわたる日中友好を祈念し、恩愛を込めて<sup>7)</sup>」2008年に建立されたものであり、枕をイメージした台座には徐葆光が詠んだ漢詩「城嶽靈泉<sup>8)</sup>」が刻まれ、その上にクバの葉の扇をモチーフにした象が飾られている。なお、徐葆光の故郷である中国の蘇州市には「葆光亭<sup>9)</sup>」という顕彰碑が建てられている。

さて、徐葆光は中国の蘇州府長洲県(現在の蘇州市)の人であり、清代の官僚である。

1712年に殿試<sup>10)</sup>で一甲三名の中に入り、翰林院編修が授けられた<sup>11)</sup>。その後、彼は1718年6月1日、琉球国王尚敬の冊封のため、康熙帝から冊封副使に任命され、翌1719年6月1日に来琉し、約8か月間滞在した。当時の琉球は中国と冊封関係にあった。「冊」とは中国皇帝の言葉を意味し、「封」とは諸国に任命すること、土地を与えることをいう。したがって、「冊封」とは朝貢国王の代替わりに、中国皇帝が新国王を任命することを指し、そのために派遣された使節が冊封使である。このときの冊封では、正使（海宝）、副使（徐葆光）の随行員を含め、詩人、画家、料理人、医者、通訳など、船員を入れると400～500名が来琉したとされている。以下、徐葆光の功績について、彼が記した2つの書物から確認しよう。



冊封七碑「中山第一」



徐葆光顕彰の碑

### ①中山伝信録

中国皇帝からの冊封は、1404年の武寧から1866年の尚泰までの間に23回行われ、多くの冊封使が来琉し、その記録を残しているわけであるが、徐葆光が琉球滞在中に見聞きしたことをまとめた『中山伝信録』は、当時の琉球の制度、地理、芸能、風俗などについて詳細に記されているため冊封使録の中でも非常に評価が高く、琉球研究の一級史料とされている。徐葆光が「琉球文化の恩人」と呼ばれる所以である。

『中山伝信録』は18世紀前半の光輝に満ちた琉球を描いた傑作である。徐葆光自身も、『中山伝信録』を執筆するにあたり次のように述べている。「このたび、私は勅命を奉じ、検討の臣海宝の副使として行き、己亥（康熙五十八年）六月一日に琉球国に着いてから、潮を観測して越年し、庚子（康熙五十九年）二月十六日に始めて帰航した。中山にあること、およそ八ヶ月であった。封宴のいとまに、まず国王にあいさつをして、『中山世鑑』および山川の図籍を見せてもらった。また、時には文字に通じた大夫や通事とともに

に、山海の間をあまねく遊び、遠近や形勢はすべて眼中にある。その制度と礼儀を考え、風俗を見聞し、些細なものでも変わったものは必ずその名をたずねて、その実を得た。見聞したことはたしかめあい、これをくりかえして、疑わしきは去り、信ぜられるものは残した。さらに、航海の針路や封宴の諸儀式の図をあわせ、六巻の書物に編集した。あえてみずから、ひとつとして遺漏はないとは言わないまでも、信を伝えるに、或いは近いとは言えようか<sup>12)</sup>。この徐葆光の言葉にもあるように、『中山伝信録』は六巻から成っている。徐葆光は、業余では歴史や民俗などの資料を集めるために地方や社寺を訪ね、琉球の高官や士族、あるいは平民たちの揮毫を求め、面会を求める者があれば会い、琉球の古い話を聞き、疑問点を正して、誤りを訂正し『中山伝信録巻第一<sup>13)</sup>』『中山伝信録巻第二<sup>14)</sup>』『中山伝信録巻第三<sup>15)</sup>』『中山伝信録巻第四<sup>16)</sup>』『中山伝信録巻第五<sup>17)</sup>』『中山伝信録巻第六<sup>18)</sup>』において、海舟・針路・封宴礼儀・世系・官制・冠服・風俗・物産などの詳細を並べ、1つひとつその形状を記したのであった。この書に匹敵する記載は、琉球側にもこれだけまとまったものはないという。

## ②奉使琉球詩

また徐葆光は、公式な報告(『中山伝信録』)として書けなかった日常生活や心情を漢詩集『奉使琉球詩<sup>19)</sup>』としてまとめている。『奉使琉球詩』は、『舶前集』『舶中集』『舶後集』の三部(長短417首)から成る。『舶前集』には1718年6月1日に北京で冊封副使を拝命してから1719年5月22日に福州<sup>20)</sup>の五虎門<sup>21)</sup>を出航するまでの作品が、『舶中集』には五虎門を出航してから6月1日に那覇港に到着し琉球滞在中までの作品が、そして『舶後集』には1720年2月16日に那覇を出港してから帰国し復命までの作品が収められている。とりわけ『舶中集』では、琉球の自然や風俗、文化、あるいは交流のあった琉球の人々—たとえば程順則<sup>22)</sup>や蔡温<sup>23)</sup>など—について叙情的に詠っている。いくつか紹介しよう。

笋崖夕照<sup>24)</sup>(波の上<sup>25)</sup>にて故郷に思いをはせる徐葆光の姿が想像できる)

毎夕、波上に遊びに来る 消え残った霞が海に浮かんでいる 日が落ちるにつれて故郷を懐かしむ心が薄くなっていく 異郷の地海東に居ることを忘れていく<sup>26)</sup>

糸満村白金巖<sup>27)</sup>(蔡温らとともに白銀堂<sup>28)</sup>を訪れた際の心情が綴られている)

辺地に行く道は今にも尽きようとしている 鞭を振り糸満村に着く 谷川は深く筏で馬を渡す 廬は木を組み合わせて門にしている 村の女が岩の隙間からうかがっている 山に住む農夫が酒樽を並べている 白金岩の下で連句を仕上げる 青い岩に力強く書かれ筆跡が残る<sup>29)</sup>

恵泉<sup>30)</sup>（徐葆光は嘉手志川<sup>31)</sup>を恵泉と名づけ白銀堂を訪れた際に立ち寄ったという）

汲み取る水は世の盛衰にかかわりなくさらさらと故城の側を流れている。今もなお水源が豊富なので谷川に導くことができる。ただ山の清らかさを守ることだけだ。石の裂け目は泉の水脈につながっている。松の木の間に溪流の流れる音が響く。夕方、泉の土手に戻って馬を休ませる。ひと掬いして宿酔をすすく<sup>32)</sup>。

贈紫金大夫蔡（温）<sup>33)</sup>（紫金大夫<sup>34)</sup>蔡温に対する尊敬のまなざしが詠われている）

蔡温の才能と品行は思ったとおり他に比べるものがない。鬢は青々として紫巾に映えている。いい環境は先生とともにある。進貢使として金葉表を携え中国皇帝に冊封の詔勅を請うたこともある。瀋江碑に彫られた銘文は流麗だ。首里市街の辺りに賜った家は新しい。最もうらやましいのは仲のいい兄弟がともに錦の帯を着けていることだ。首里城での勤めを終えたあと二人して年老いた父親の面倒をみている<sup>35)</sup>。



波の上（那覇市若狭）



白銀堂（糸満市糸満）



「恵泉の龍」の碑（糸満市大里）



恵泉／嘉手志川（糸満市大里）

このように徐葆光の琉球滞在中の日常生活や心情が綴られた『奉使琉球詩』は、公式の報告書である『中山伝信録』と並び、琉球史の研究に極めて重要な史料とされている。

なお、最近の研究によって、冊封使が見た琉球の様子を絵図と解説文で記録した『冊封琉球全図<sup>36)</sup>』の著者が徐葆光であることが判明している<sup>37)</sup>。

## (2) 玉城朝薫生誕の地と生誕三百年記念碑（たまぐすくちょうくん1684～1734）

玉城朝薫生誕の地は現在的那覇市首里儀保町であり、カラガー橋<sup>38)</sup>のたもとに「劇聖 玉城朝薫生誕之地」と刻まれた石碑が存する。一方、生誕三百年記念碑は、那覇市首里末吉町の末吉公園内に存する。この顕彰碑は、文字どおり彼の生誕300年を記念して、1985年に建てられたものであり、横約5 m40cm、厚さ約40cmの大きさで、朝薫五番の名場面をあしらったレリーフがはめられている<sup>39)</sup>。朝薫五番とは、彼が創作した歌舞劇「組踊」の作品であり、「執心鐘入<sup>40)</sup>」「二童敵討<sup>41)</sup>」「銘苅子<sup>42)</sup>」「女物狂<sup>43)</sup>」「孝行之巻<sup>44)</sup>」を指す。以下、彼の功績を確認しよう。



玉城朝薫生誕の地に建つ石碑



玉城朝薫生誕三百年記念碑

玉城朝薫は、琉球音楽にのせて演じる歌舞劇「組踊」の創始者として歴史に名を残している。彼の唐名は向受祐といい、1684年に玉城間切の総地頭の嫡男として首里の儀保に生まれた。幼いころに母と離別、父と死別した彼は、祖父の玉城親方朝恩のもとで育てられるが、祖父もまた朝薫が8歳のときに亡くなり、幼くして跡目を継ぐことになる。それでも彼は、若いころから琉球固有の音楽や舞踊を修得し、日本への使節「江戸上り<sup>45)</sup>」「江戸立ち」にも随行し、日本の能、狂言、歌舞伎、人形浄瑠璃にも造詣が深く、生涯に「踊奉行<sup>46)</sup>」を三度も任命され、琉球・沖縄の芸能に多大な業績を残したのである<sup>47)</sup>。

いわゆる琉球文化は、中国、日本、韓国および南方諸国の文化を取り入れたうえで、

独自の文化にまで高めているところに特徴があるといわれているが、組踊の場合もまったくそのとおりで、琉球土着の村踊りや音楽、日本舞踊の本質や様式、中国の京劇などを吸収し、独自の音楽劇として確立している。組踊の三要素として、①せりふ、②音楽、③踊りが挙げられる<sup>48)</sup>。組踊の「せりふ」には、沖縄の古語が多く用いられており、立方と呼ばれる演者が唱えるものとなっている。「せりふ」は、場面によって違いはあるが、8音・6音で構成された琉球独自のリズムの詞章で表現され、登場人物の役柄や性別によって、旋律や抑揚が異なる。また「音楽」は、「歌・三線」と呼ばれる歌唱と器楽（三線、箏、胡弓、笛、太鼓など）を中心に、琉球音楽を奏でるものである。さらに立方の所作を「踊り」といい、その基本は琉球舞踊である。所作には、演技の際の立ち居振る舞いや演目内の舞踊など、すべての動作・表現が含まれている<sup>49)</sup>。それら3つの要素から成り立つ組踊は、「観る」ものではなく「聴く」ものであるとも言われている。

さて、組踊のはじまりは、玉城朝薫が34歳のときに、翌年（1719）の尚敬王冊封のための踊奉行として創作を命じられたことにある。このことについて、琉球の正史である『球陽』の尚敬王六年には、「首里ノ向受祐、博ク技芸ニ通ス。命セラレテ戯師ト為ル。始メテ本国ノ故事ヲ以テ戯ヲ作ツテ人ニ教フ。次年演戯シテ冊封天使ノ宴席ニ供興ス。其戯此レヨリシテ始レリ。<sup>50)</sup>」と記されている。つまり、尚敬王は芸能に精通した玉城朝薫に命じて、琉球の故事をもとに組踊を創作させたのである<sup>51)</sup>。そして、組踊が初めて演じられたのは、尚敬王冊封のときであった（前節で述べたとおり、このときの冊封正使は海宝、冊封副使は徐葆光である）。中国皇帝の使者である冊封使をもてなす公式の行事は「冊封七宴」と呼ばれ、①諭祭宴<sup>52)</sup>、②冊封宴<sup>53)</sup>、③中秋宴<sup>54)</sup>、④重陽宴<sup>55)</sup>、⑤餞別宴<sup>56)</sup>、⑥拜辞宴<sup>57)</sup>、⑦望舟宴<sup>58)</sup>から成り、そのうちの第四の宴「重陽宴」において、玉城朝薫が創作した「二童敵討」と「執心鐘入」が演じられたのである。儒教道徳の「忠」「孝」をテーマにし、台詞の唱えと調和の取れた歌や演奏、舞踊を取り入れ、格調高い様式美を備えた演劇として、組踊は冊封使に深い感銘を与え、冊封の宴は大成功をおさめたとされる<sup>59)</sup>。

組踊の創始者として語られる機会が多い玉城朝薫であるが、役人としても有能で多方面で功績を残したとされている<sup>60)</sup>。その活躍が認められ、44歳のときに親方となり、その後、50歳でこの世を去ったのであるが、彼がより長命であったならば、三司官の位につき、蔡温の後継者になったであろうと惜しまれるほどであった。

なお、彼の墓は沖縄戦で大きな被害を受けたが、その後の発掘調査を経て、2005年に修復工事が完了し、現在、浦添市前田の前田トンネルの上部に、その姿を確認することができる。



玉城朝薫の墓の入口に建つ石碑



玉城朝薫の墓

### 3. まとめ

さて、本稿では徐葆光と玉城朝薫の功績を概観した。徐葆光は、冊封使（冊封副使）という立場にありながら、その卓越した洞察力と発想力をもって、当時の琉球を表現・描写した人物である。徐葆光は8か月という限られた滞在期間の中で、どのように琉球に関するあらゆる情報を収集し、分析し、整理したのであろうか。それを可能にするためには、自身による観察だけではなく、琉球の人々との深い交流があったことが推察される。この深い交流こそが、徐葆光の最大の「強み」となったのではなかろうか。彼が生きた時代の船旅は、さほど航海技術も進んでおらず、死と隣り合わせの旅<sup>61</sup>であったことは想像に難くない。そのような命がけの旅をとおして築いた中国と琉球の交流は、単に冊封・朝貢という関係にとどまらず、それらを超えた人間同士の真の意味での交流であったのではないか。敬意と尊敬をもって接し、文化を伝え、交流を図り、心を込めてもてなす姿。それこそが琉球の外交の真髄（芸能と文化）であったといつてよかろう。立場や状況に違いはあるものの、徐葆光が生きた時代の中国と琉球との交流は、現代の日本における対外関係の在り方に何らかの示唆を与えるのではないだろうか。

玉城朝薫は、世界が認める琉球の伝統芸能「組踊」の創始者である。彼が創った琉球版オペラともいうべき総合芸術「組踊」は、その後、士族階級の娯楽として親しまれるようになり、琉球処分以降は古典芸能の役者たちに受け継がれてきた。そして、現在も沖縄を代表する芸能として上演を重ねている。玉城朝薫の才能と努力は、どれほどのものであったのだろうか。また、彼は徐葆光と交流があったとされるが、どのような場で、何を、どのように語り合ったのだろうか。そうぞうりよく（想像力・創造力）豊かな二人の交流は、限られた時間とはいえ、意義深く、その後の中国と琉球の在り方に影響を与える対話であったに違いない。

徐葆光と玉城朝薫。徐葆光が著した『中山伝信録』や『奉使琉球詩』は、その後の琉球研究に大きな影響を与え、今日でも第一級の史料として扱われている。一方、玉城朝薫が創作した組踊は、1972年に国指定重要無形文化財となり、また2010年にはユネスコの世界遺産「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載・登録され、無形遺産の傑作と評価されるまでに至り、現代社会にしっかりと根づいている。彼らの「功績」と「交流」は、歴史を紐解くための手がかりといった枠組みにとどまらず、現代に生きる我々のあるべき姿を問うているように思えてならない。

#### 4. おわりに

これまで筆者は「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる」と題した資料・調査報告を、本稿を含めて3編記したが、残念ながらその「ひととなり」については示せずにいる。その人柄や人物を知るためには、偉人たちの功績だけではなく、たとえば徐葆光が記した『奉使琉球詩』から彼の心情を汲み取るような作業が必要となろう。今後は一人の人物に焦点を当て、より深く考察し、まだ見ぬ人物像との出会いをとおして現代社会を見つめたい。その実現のためには、中国語で記された書物を読む必要があるかもしれない。あるいは多くの琉球人が訪れた中国、とりわけ福州あたりに足を運ぶ必要もあるかもしれない。

琉球史や琉球文化の研究者諸氏が記す論文や著書に触れるたびに、その詳細な様に驚きと感動を覚え、頭が下がる。諸氏からの刺激を受けながら、程順則が詠んだように「下手だからこそ習い、及ばぬと思ひ悩まず<sup>62)</sup>」取り組んでいきたい。研究とは執念である。

#### 注

- 1) 「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる（Ⅰ）—南城市と那覇市のフィールドワークから—」（流通経済大学社会学部論叢第27巻第2号所収）、「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる（Ⅱ）—那覇市のフィールドワークから—」（流通経済大学社会学部論叢第28巻第1号所収）。
- 2) 筆者が巡った史跡は、ほかに「嘉手志川（恵泉）」「南山城跡」「他魯毎の墓」「山巔毛」「白銀堂」「具志川城跡」「糸数城跡」「知念城跡」である（2017年11月5日実施）。
- 3) 徐葆光（1719）「中山第一」、全魁（1756）「雲根石髓」、趙文楷（1800）「陽谷靈源」、齊鯤（1808）「活潑潑地」、林鴻年（1838）「源遠流長」、高人鑑（1838）「飛泉漱玉」、趙新（1866）「靈脈流芬」の7つの石碑を指す。
- 4) 「瑞泉」は、「立派な、めでたい泉」の意。
- 5) 瑞泉門へ向かう手前に存する樋川。1522年、皇帝即位の慶賀使として渡明した沢岷親方盛里が買い求め、その吐水石龍頭を樋川に取り付けたことにより、以後、御龍樋と呼ばれるよ



- うになった(古都首里探訪会編著(2016)『王都首里見て歩き—御城と全19町ガイド&マップ—』古都首里探訪会, 14ページ)。
- 6) 「泉の水量は、水質は琉球第一の泉である」の意(首里城公園—正殿への道 <<http://okipark.jp/shurijo/guide/52>> 2017年11月7日アクセス)。
- 7) 「徐葆光顕彰の碑」の台座に、徐葆光記念事業期成会会長諸喜田茂充の名で記されている。
- 8) 徐葆光が『奉使琉球詩』に記した院旁八景の1つであり、台座には「城嶽靈泉 “瑞泉托王居 巨榜標金闕 玉乳瀉巖溜 冷泠自幽絶” 徐葆光」と刻まれている。院旁八景は、ほかに「泉崎夜月」「臨海潮聲」「糸村竹籬」「龍洞松濤」「笋崖夕照」「長虹秋霽」「中島蕉園」をいう。なお、この院旁八景をもとに、葛飾北斎が琉球八景を描いたとされる。
- 9) 2008年に首里城に向けて建てられた顕彰碑。全体の高さは5.3m、塔頂の飾りの高さは徐葆光の生涯を示す69cm、屋根の部分の高さは彼の生まれた年にちなんで1671mm、それらを支える5本の柱には、彼が『奉使琉球詩』に記した院旁八景の1つである「泉崎夜月」が刻まれている。
- 10) 科挙の最終試験のこと。
- 11) 鄔揚華(2003)『徐葆光「海舶集」日文注釋』中國文聯出版社, はしがき1ページ。
- 12) 原田禹雄(1999)『徐葆光 中山伝信録 新訳注版』冊封使録訳注シリーズ4, 榕樹書林, 18ページ。
- 13) 原田禹雄(1999)によると、「封舟」「渡海兵役」「更《定更法》」「針路」「前海行日記」「後海行日記」「歴次封舟渡海日期」「風信」「風暴日期」「天妃靈応記」「封舟救済の靈蹟」「諭祭文《祈・報二道》」「春秋祀典の疏」が収められている。
- 14) 原田禹雄(1999)によると、「封舟到港」「天使館：勝記付録・附旧使館」「天妃宮行香」「中山先王廟」「儀注(諭祭)」「諭祭先王文《二道》」「中山王府」「儀注(冊封)」「冊封詔」「賜勅：琉球国王印」「中山王肄館儀仗：賀封路供」「中秋宴」「重陽宴：饒別宴・拜辞宴・望舟宴」「中山王謝恩表」「又疏：貢物」「又請存旧礼以勞使臣疏」「礼部題本」が収められている。
- 15) 原田禹雄(1999)によると、「中山世系：舜天・舜馬順熙・義本・英祖・大成・英慈・玉城・西威・察度・武寧・思紹・尚巴志・尚忠・尚思達・尚金福・尚泰久・尚徳・尚円・尚宣威・尚真・尚清・尚元・尚永・尚寧・尚豊・尚賢・尚質・尚貞・尚益・尚敬」が収められている。
- 16) 原田禹雄(1999)によると、「星野」「潮」「琉球三十六島」「琉球地図」「紀遊」が収められている。
- 17) 原田禹雄(1999)によると、「官制」「職官員額」「冠服」「儀従」「坐褥」「氏族」「取士」「采地《禄》」「土田」「曆」「礼儀(年中行事)」「学」「官生が国学に入って読書すること」「官生が学に入り読書することを代請したてまつるの疏」「琉球官生の入監に関する礼部題本」「禪宗」「僧禄」が収められている。
- 18) 原田禹雄(1999)によると、「風俗」「頂髪を剃る」「五官正」「屋舎」「米廩」「器具」「女集《錢 女飾》」「舟」「轎」「馬」「長弓短箭」「月令」「物産：海松・石芝」「字母」「琉球語」が収められている。
- 19) 『海舶集』とも呼ばれる。
- 20) 閩江下流に位置する港湾都市。ガジュマル(榕樹)が多くあることから「榕城」とも呼ばれる。明代には「琉球館」が設置され、琉球との交易指定港であった。

- 21) 福州の閩江を出たところにある島。この島を過ぎると外洋となる。
- 22) 名護親方寵文とも呼ばれる。彼の功績として、道德教本である『六諭衍義』の普及、琉球初の公的教育機関である「明倫堂」の設立、中国の福州と那覇とを航行するための手引書である『指南広義』の執筆などが挙げられる。
- 23) 具志頭親方文若とも呼ばれる。琉球が生んだ最大の政治家とされ、政治はもちろん、農業、林業、科学、思想、学問など、多くの分野において才能を発揮した。
- 24) 日日晩來遊、残霞水外浮。郷心随日下、不覺海東流。(鄔揚華 (2003) 『徐葆光「海舶集」日文注釋』中國文聯出版社、213ページ)
- 25) 現在の住所表記上は那覇市若狭である。波上宮や波の上うみそら公園などが存する。
- 26) 徐葆光が見た琉球・映画製作委員会、株式会社シネマ沖繩 (2013) 「徐葆光が見た琉球一冊封と琉球一」株式会社シネマ沖繩。
- 27) 邊土行將盡、(喜屋武極南邊土去村口半里許。) 搖鞭絲滿村。溪深杳渡馬、廬合樹爲門。村女窺崖隙、山農列酒罇。白金聯句就、書破翠巖痕。(鄔揚華 (2003) 『徐葆光「海舶集」日文注釋』中國文聯出版社、264ページ)
- 28) 糸満市にある拝所。「よりあげ御嶽」とも呼ばれる。自然の鍾乳石(シロガネの御イベ)が航海の安全と豊漁を司る神として祀られている。
- 29) 徐葆光が見た琉球・映画製作委員会、株式会社シネマ沖繩 (2013) 「徐葆光が見た琉球一冊封と琉球一」株式会社シネマ沖繩。
- 30) 勺水無興廢、冷冷傍故城。猶堪資谷汲、只守在山清。石罅通泉脉、松間作溜聲。夕陂還歇馬、一掬漱餘醒。(鄔揚華 (2003) 『徐葆光「海舶集」日文注釋』中國文聯出版社、265ページ)
- 31) 琉球の三山時代に南山を支えた湧水。当時の南山王であった他魯毎が、中山王の尚巴志の所有する金屏風と交換したことがきっかけで南山が減んだとされる。
- 32) 徐葆光が見た琉球・映画製作委員会、株式会社シネマ沖繩 (2013) 「徐葆光が見た琉球一冊封と琉球一」株式会社シネマ沖繩。
- 33) 中郎才品果無倫、兩鬢青青映紫巾。柳檻春風陪講度、(爲國王師。) 星輶金葉請皇綸。(海中諸島進貢例用金葉表。) 羈江碑上鴻文麗、首里坊邊賜宅新。最羨熏篋聯錦帶、(第蔡淵同官中議大夫、父蔡鐸七十餘以紫金大夫致仕。) 朝回雙奉白頭親。(鄔揚華 (2003) 『徐葆光「海舶集」日文注釋』中國文聯出版社、249~250ページ)
- 34) 対外的名称で久米村最高の位階のこと。対内的な呼び名は親方。
- 35) 徐葆光が見た琉球・映画製作委員会、株式会社シネマ沖繩 (2013) 「徐葆光が見た琉球一冊封と琉球一」株式会社シネマ沖繩。
- 36) 北京故宮博物院所蔵。解説文については徐葆光が記し、絵図については画家が描いたとされる。
- 37) 研究に携わった茂木仁史、森達也の両氏は、『冊封琉球全図』が康熙帝に献本した唯一の肉筆本で、『中山伝信録』は同図をもとに書かれたものであると考察している(毎日新聞のニュース・情報サイト <<https://mainichi.jp/articles/20170518/rky/00m/040/001000c>> 2017年6月23日アクセス)。
- 38) カラガー(加良川)と呼ばれる井戸の下り口に架かる橋のこと。
- 39) 古都首里探訪会編著(2016)『王都首里見て歩き—御城と全19町ガイド&マップ—』古都首里探訪会、138ページ。

- 40) 中城若松という美少年が、首里王府に御奉公に行く途中、行き暮れて村はずれの一軒家に一夜の宿を乞うと、女は親が留守中だといって断わるが、男が若松だと名乗るに及んで、以前からその美貌に恋慕していた女は、好機とばかりに宿を貸し、その上誘惑する。御奉公ある身の若松は言いつがる女を振り捨てて逃げ出し、末吉の寺の住職に救いを求める。座主は若松を鐘の中にかくし、なお小僧たち三人に女人禁制を厳命する。しかし小僧たちは、愛欲の炎に身をこがす女を拒みとおせない。座主は鐘の中から若松をつれ出して他にかくまう。女は先ほどまで若松のかくれていた鐘に対して「今に不審なあ鐘」と叫んで鐘にとびこんで鬼面の形相ものすごく、咀いの炎をはく。座主は三人の小僧たちとともに法力ではらいのけようと祈る。法力で鬼になった女は退散させられ、若松は危い命を助かる。(沖縄芸能協会編(1969)『劇聖・玉城朝薫一組踊上演250年記念誌』沖縄タイムス、23ページ)
- 41) 天下をねらう勝連の按司あまおへ(阿麻和利)は、中城城主である護佐丸を首里王府に讒言してやすやすと討ち果たした。護佐丸亡きあとは誰一人としてこわいものはなく、すっかり気をよくして毎日あそびたわむれ、今日とて供三人をひき連れて意気揚々として野遊びに出かける。一方、護佐丸の遺子鶴松・亀千代の兄弟は十三才と十二才になって、父の仇あまおへのすきをうかがっている。おりしもあまおへが野遊びに出かけたということをきき、この機会に宿願をはたそうとたく決心し、母に願い出る。子供の決心のほどを察し、ゆるしてやる。二人は踊り子になりすましてあまおへに近づく。あまおへが酒に酔い、上ぎげんになってうかれおどるすきに二兄弟は名乗りをあげ、無事討ち果たす。(沖縄芸能協会編(1969)『劇聖・玉城朝薫一組踊上演250年記念誌』沖縄タイムス、44ページ)
- 42) 実直な青年銘苺子は、野良仕事からの帰りに松の木にかかっている不思議な衣裳(羽衣)を見つけ、すばやくかくしてしまう。髪を洗って、さあ帰ろうとした天女は、松の木にかけておいた羽衣がないのに気がつき、そこにいた銘苺子がとったにちがいないと問いただがわたさず、話しあいの末、女をわが家へつれて帰り、夫婦の縁を結ぶ。年月がすぎで二人の間には一男一女が出来、仲むつまじく暮らしていたが、姉嬢が弟の子守の時に、母の飛衣(羽衣)のありかを歌に出して口ずさむ。それをきいた天女は、さがし出して夜明けとともに飛び去ろうと決心する。二人の子供をねかしつけて夜明けの雲に乗り、ふりかえりながらとび去っていく。夫の銘苺子は半ばあきらめるが、二児はあきらめることができず、追って行こうとする。そのうち首里王府から使者が来て、銘苺子親子に王からの通知を届ける。親子三人はこの上ない幸せを複雑な気持ちで受ける。(沖縄芸能協会編(1969)『劇聖・玉城朝薫一組踊上演250年記念誌』沖縄タイムス、74~75ページ)
- 43) 母子二人でむつまじく毎日を暮らしていた家族が、ある日、その子が友だちと遊びに夢中になっているうちに遠くまでやってきた。そこへ現われた人盗人に人形をみせられ、さそわれる。子供は母親にことわりもしていないのだとその場をのがれようとするが、強引にひっぱられて人里はなれた所へつれ出される。盗人は山原(国頭地方)につれて行って高く売るとばそうと考える。途中、日が暮れてしまい、ある寺に一夜の宿を乞う。盗人の熟睡したのを見はからって、子供はぬけ出して寺に救いを求める。小僧の機智で無事に救われる。一方、母親は一人子が行方不明になったので、掌中の玉をとられてしまい、気が狂ってさまよい歩く。偶然にこの寺までやってきて、住職や小僧たちのとりはからいで愛児と邂逅して正気にかえり、ともに踊りながらわが家へ帰っていく。(沖縄芸能協会編(1969)『劇聖・玉城朝薫一組踊上演250年記念誌』沖縄タイムス、102ページ)

- 44) 北谷間切の山中にある漏池に大蛇が棲んでいて、風や雨をよび、そのために家や蔵は吹き崩され、田畑の農作物は吹き枯されてしまう。百姓はほとんど餓死するまでになり、首里王府への納納もできない状態である。うらないによると、十四、五才になる童子をいけにえにしてささげるとたたりが止むというので高札を立てて犠牲者をつる。そこにおちぶれた貧乏士族の一家があって、姉弟の二人は落穂をひろってどうにか露命をつなぎ、母を養っている。高札を見て姉がいけにえになると申し出る。いよいよ祭壇が池畔に設けられ、大蛇が火を吐いてひとのみにしようといけにえに近づいた時、天から神の使者があらわれ蛇は肉体分散してきえる。そこへ姉娘のくわだてにおどろいてかけつけた母は、娘の無事な姿をみて喜び、ひしと抱きあう。一家はとりたてられ、たのしい毎を送るようになる。(沖縄芸能協会編(1969)『劇聖・玉城朝薫—組踊上演250年記念誌』沖縄タイムス、139ページ)
- 45) 1609年の薩摩侵攻以降に、琉球王府が江戸へ派遣した使節団のこと。徳川家の将軍が代わると「慶賀使」、琉球国王が代わると「謝恩使」が派遣された。1634年から1714年の間に18回行われたとされる。ただし、琉球においてはこの言葉が使われた形跡はなく、公式には旅立ちを意味する「江戸立ち」が用いられていた。
- 46) 国王、王妃、王子などの年忌行事や中国からの冊封使を歓待する儀式のときに、舞踊の監督や指揮を執る役職のこと。玉城朝薫に対する三度の任命は、①尚益王一周忌(朝薫29歳)、②尚貞王七年忌(朝薫31歳)、③尚敬王冊封(朝薫34歳)のためになされた。
- 47) 徐葆光が見た琉球・映画製作委員会、株式会社シネマ沖縄(2013)「徐葆光が見た琉球—冊封と琉球—」株式会社シネマ沖縄。
- 48) 文化デジタルライブラリー—琉球芸能編「組踊」(<<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc19/>>) 2017年11月7日アクセス
- 49) 同上
- 50) 向受祐二命シ、始メテ本国ノ故事ヲ以テ戯ヲ作ル。(桑江克英訳註(1971)『球陽』三一書房、139ページ)
- 51) 井上秀雄監修、JCC出版部著(2011)『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版、105～106ページ。
- 52) 崇元寺で行われる前国王の霊を弔う儀式。崇元寺には歴代国王の位牌が安置されていた。尚敬王冊封の際は6月26日に行われたとされる。
- 53) 首里城の御庭において、冊封使が中国皇帝からのメッセージを読み上げ、新国王の承認を行う儀式。尚敬王冊封の際は7月26日に行われたとされる。
- 54) 歓待の宴。まず「神歌祝頌」が演じられ、続けて楽器の音に合わせて「笠舞」「花索舞」「籃舞」「拍舞」「武舞」「毬舞」「桿舞」「竿舞」「戲楽」などの宮廷舞踊が演じられた。尚敬王冊封の際は8月20日に行われたとされる。
- 55) 歓待の宴。龍潭でのハーリーから始まり、その後は城に戻り「老人祝聖之事」「鶴亀二児が父の仇を復するの古事(二童敵討)」「鐘魔の事(執心鐘入)」「天孫太平歌」などが演じられた。尚敬王冊封の際は10月20日に行われたとされる。
- 56) 冊封使の帰国を惜しむ宴。国内の故事が演じられ、尚敬王冊封の際は11月1日に行われたとされる。
- 57) 冊封使の帰国を惜しむ宴。尚敬王冊封の際は11月10日に行われたとされる。
- 58) 国王が冊封使の滞在する天使館に向いて小宴を開き、最後の対面をする儀式。尚敬王冊

封の際は12月26日に行われたとされる。

- 59) 井上秀雄監修, JCC出版部著 (2011) 『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版, 107ページ。
- 60) 那覇港の工事に携わり無事に完了させたり, 飯店(商店)を開き王府より賞を賜ったり, 米を備蓄して凶年に備え王府より褒書を賜ったりしている(井上秀雄監修, JCC出版部著 (2011) 『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版, 107ページ)。
- 61) 当時, 航海の安全を「天妃宮」において祈願することが慣例であった。天妃宮とは, 航海安全の守護神である「媽祖」を祀った宮をいう。天妃とは皇帝から送られた媽祖の称号である。徐葆光も福州の亭江中学校内にある怡山院天妃宮にて安全を祈願し, 琉球に到着した際には久米村の天妃宮にお礼の参拝をしたとされる。
- 62) 程順則が詠んだ歌に「下手からど習て 勝れいんすゆる 及ばらぬと思て 思案するな」というものがある。この歌のころは「下手だからこそ練習に練習を重ねて上手になるものである。『自分にはとうてい及ばない』と思つて悩むことはない」となる(安田和男(2009) 『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書001, ボーダーインク, 34ページ)。

## 参考文献

- 赤嶺守(2004) 『琉球王国—東アジアのコーナーストーン』講談社
- 井上秀雄監修, JCC出版部著(2011) 『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版
- 上里隆史・喜納大作(2015) 『新装改訂版 知れば知るほどおもしろい 琉球王朝のすべて』河出書房新社
- 鄔揚華(2003) 『徐葆光「海舶集」日文注釋』中國文聯出版社
- 沖縄芸能協会編(1969) 『劇聖・玉城朝薫—組踊上演250年記念誌』沖縄タイムス
- 桑江克英訳註(1971) 『球陽』三一書房
- 古都首里探訪会編著(2016) 『王都首里見て歩き—御城と全19町ガイド&マップ—』古都首里探訪会
- 童宏民(2014) 『冊封副使徐葆光の眼光—「奉使琉球詩」の分析を中心に』琉球大学
- 原田禹雄訳註(1998) 『蔡鐸本 中山世譜』琉球弧叢書4, 榕樹書林
- 原田禹雄訳註(1999) 『徐葆光 中山伝信録 新訳注版』冊封使録訳注シリーズ4, 榕樹書林
- 増田康弘(2017) 「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる(Ⅰ)—南城市と那覇市のフィールドワークから—」『流通経済大学社会学部論叢 第27巻第2号』流通経済大学
- 増田康弘(2017) 「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる(Ⅱ)—那覇市のフィールドワークから—」『流通経済大学社会学部論叢 第28巻第1号』流通経済大学
- 諸見友重訳註(2011) 『訳注 中山世鑑』琉球弧叢書24, 榕樹書林
- 安田和男(2009) 『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書001, ボーダーインク
- 吉成直樹監修(2013) 『琉球王国がわかる!』成美堂出版

## 参考サイト

沖縄タイムス+プラス <<http://www.okinawatimes.co.jp/>> 2017年11月7日アクセス

がじゅまるの樹の下で。〈[http://blog.goo.ne.jp/wa\\_gocoro](http://blog.goo.ne.jp/wa_gocoro)〉 2017年11月7日アクセス  
首里城公園 〈<http://oki-park.jp/shurijo/>〉 2017年11月7日アクセス  
徐葆光が見た琉球 〈<http://johoko.jp/>〉 2017年11月7日アクセス  
文化デジタルライブラリー 〈<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>〉 2017年11月7日アクセス  
琉球新報 〈<http://ryukyushimpo.jp/>〉 2017年11月7日アクセス

#### 参考映像

徐葆光が見た琉球・映画製作委員会，株式会社シネマ沖縄（2013）「徐葆光が見た琉球一冊封と琉球一」株式会社シネマ沖縄